

つて「宗門白書」が発表され、それを承け同年の『真宗』9月号に、教
学局長・訓覇信雄名で「僧伽形成へ
の第一歩」という論説が掲載され
た。その後1959(昭和34)
年に同朋会館が竣工し、1961
(昭和36)年に宗祖七百回御遠忌が
厳修され、翌1962(昭和37)年
に真宗同朋会運動が発足する。
その提唱者である訓覇信雄師
は、1992(平成4)年、イン
タビューの中で「どういう志願で
同朋会運動を担ってこられたか」
という問いに対して、「同朋会運
動が求めようとしたのは、近代か
ら現代に変わりつつある危機的な
時代の行き詰まりを突破して、僧
伽を現成させようと。願生浄土と
いう立脚地において成り立つ僧伽
を現成したいということが始まっ
た。それを教団でやろうとしたの
は、まあ『維摩経』で言えば、淤
泥華ですわ。淤泥以外に現実とい
うものはないと受け止めたからで
すわ。もつとききれいなところで、
それこそ寺を捨ててもやれたはず
ですが、そうではなく一番ひどい
ところを自分が引き受けようと思
ったんだ。それも、自分は正しい
が、教団の中で悪いのはあの人た
ちだというように、善人ぶるので

もし批判だけだったら、そんな
ものは善人の独善や。名もない
人々、門徒衆が血を流した教団。
やっぱりその生命を復活させるの
は当然ですよ。門徒への責任です
よ。(中略)その一番ドロドロした
前近代的、封建的、あるいは思想的
にも、政治的にも、経済的にも、そ
して情的にも、非常に複雑に絡み
合っただけでもない教団を、
自分自身の責任として受けて立っ
て、その中でこそ念仏の共同体を
実現することが、どうしようもな
いこの現代社会の中に生きる力、
念仏の力を証明してゆくことにな
る。そこに実現する以外に、人類の
救いというものも実は無いという
ことで、同朋会運動が発足したん
ですわ」(『教化研究111/112』
僧伽の現成を願って―訓覇信雄氏に聞
く―)と振り返っている。

同朋会運動は、どこまでも真宗
教団が本来の姿としての僧伽の現
成を願ったものである。その本来
の僧伽とは、決して利害ではなく、
さらに地縁、血縁という事をもこ
えた個々の人間と人間が、根源的
な意味で結ばれ連帯し支えあつて
いく中で、生きる希望を見出して
いける人間関係の在り方を求める

場を、僧伽というところであらう。
「ある人が『同朋会運動をやっ
てきたけれども、挫折しましたね。
いろいろ苦勞してくださいましたん
でしょうけれども、同朋会運動は
失敗ですね」と、訓覇先生に言っ
たのです。すると、そのときに訓
覇先生が何とおっしゃったか。こ
れが私は忘れられないのです。『同
朋会運動って、始まるとるんか
ね』。このひと言でした」(池田勇
謙著『いのちとひかり』東本願寺出版部)
それは、施策としての運動を指摘
したのではなく、個の自覚として
の「我」にとつて、本当に同朋会
運動が始まっているのですかと
いう厳しい指摘であろう。そしてそ
こにある相は、まさしく「同朋会
運動をしている」相であり、同時
に教化者意識で御門徒に面してい
る「浄土真宗を分かった」相である。
訓覇師は「僕は、門徒に育てら
れて、教えられてきた」と常に語
っていたという。教化者意識に立
つことを自ら常に戒め、門徒と同
座し、門徒と共に生き、門徒と共
に求道し続けた「同朋会運動提唱
者」である師の原点は、ここにあ
ったのではないだろうか。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第45回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
を回復しよう すんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

真宗同朋会運動50年に向けて

真宗同朋会運動提唱者 訓覇信雄(その3)

その検証 興り(六)

教化本部 古卿 誠幸

真宗同朋会運動50年に向けた運動の再検証。今回は昭和22年の「同朋共生運動」から始まる真宗同朋会運動発足に至るまでの歴史を辿りながら、改めて訓覇信雄師の運動提唱にかけられた願いについて掲載する。
また「点描」では1963(昭和38)年に報告された「札幌地域同朋の会」の開設及び都市部の変化について掲載する。

終戦後、極度の物資不足の中、昭和22年「同朋共生運動」が発足した。それは「同朋互助精神の振興、一派公益事業の開発助成を目的とする」というものであり、「同朋共生運動薬品頒布について、すべての人々が手を取りあい、力足らぬ人々が互いにたすけあい麗しく住みよいかの家の家をわれわれの手で心をつくしてつくり出しましょう」(『真宗』昭和23年1・2月号)という記事もあった。
宗祖親鸞聖人七百回御遠忌を10年後にひかえ、暁鳥敏内局によつて「同朋生活運動」が提唱される。これらの運動がやがて同朋会運動となる背景にあった。それは既に教団の枠を超えた「純粋な信仰運動」を名乗るものである。1956(昭和31)年、宮内局による

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け総上山

▼奉仕団 4月▲
4/11~12
第4組 瑞雲寺サラの華奉仕団 15名



感話中「今のちがあなたを生きている」のテーマが私を迎えてくれたと話した途端泣き出した男性の姿。一同涙の中に感激を新たにしました。

4/11~12
第9組 噴火湾ブロックお待ち受け奉仕団 28名



座談の席でお話しされた姿が、地元のお付き合いの中ではあまり見ることの出来ないご門徒さんの本音の姿を発見した感じがして印象的でした。

4/18~20
第19組 後期教習奉仕団 18名



「帰道したらお寺で聴聞継続、同窓会をしよう」を宣誓し、参加者各々熱い思いを抱いて本山を後にしました。

▼一日参拝 4月▲
4/7
第9組 陽願寺 3名



毎年春秋に家族共々親鸞聖人のおられる本山へ参詣できる喜びを感じております。祖先の恩、阿弥陀様の徳に感謝の日々です。

4/7
第12組 法流寺 45名



こだわった外陣揃いの正信偈 皆緊張必死の面持ち 世代超え通い合う心にしみる恩徳讃

4/22
第4組 坊守会 7名



明るい照明の下で生まれ変わった御影堂をゆっくりと拝見させていただきました。